



生誕180周年

NHK 大河ドラマ「青天を衝け」放送記念

# 「時代の変革者 渋沢栄一の半生」

## 第1回：深谷編（上）

ぶぎん地域経済研究所 取締役 研究主幹 松本 博之  
(公益財団法人 渋沢栄一記念財団維持会員)



侍姿の栄一  
(渋沢史料館所蔵)

### 連載のはじめに

深谷市に生まれ、育ち 60 有余年。当研究所での最後の仕事が、郷土の偉人として敬愛する渋沢栄一翁についての連載を執筆することとなった。

これまでの深谷市、同経済界、歴史愛好者や市民たちのたゆまぬ活動の賜物として、2021 年の NHK 大河ドラマでは、栄一翁を主人公にした「青天を衝け」の放送、2024 年から発行される新紙幣 1 万円札への肖像の採用が決まり、一市民として大なる喜びだ。また 2020 年は奇しくも栄一翁の生誕 180 周年の記念すべき年でもある。そこで NHK 大河ドラマ放送に先駆けて、幕末期から明治という激動の時代に、いかに時代の変革者として活躍したかという内容を中心に彼の半生を紹介していきたい。

栄一翁の自伝である「雨夜譚」や彼の談話を筆記編集した「青淵回顧録」等の資料をもとに、学術論文でもなく、小説でもない、身近なエピソードを盛り込み、等身大の栄一翁の半生を描くことができたらと思う。史実に忠実で、かつ読み易い文章を心掛け、来年の NHK 大河ドラマが“10 倍楽しめる”ような内容にしていきたいと思っている。

それでは、栄一翁の故郷、血洗島村（現深谷市豊里地区）の紹介からスタートする。



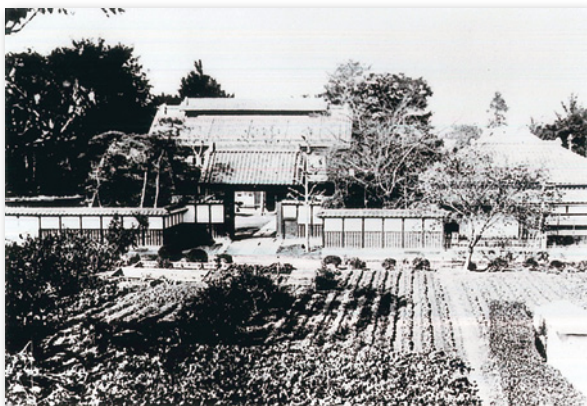
## 1 故郷、血洗島の風景

渋沢栄一（以下、栄一）は、天保11年（1840）に武蔵国榛沢郡血洗島村という小村、現在の埼玉県深谷市に生まれている。JR高崎線深谷駅から北西に5kmほどのところに血洗島村があった。そこで栄一は23歳まで過ごしている。血洗島村は旧八基村に属しており、その後周辺の他村と一緒に豊里村となったあと、1973年に深谷市と合併している。

### 血洗島村の地名の由来

“ちあらいじま”を初めて耳にする方にはやや恐怖心を抱くような地名であるが、この由来には、今の流行りの言葉で言うと差し詰め“諸説あり”と言ったところだ。

- 赤城の山霊が他の山霊と闘って片腕を挫かれ、その傷口を洗った場所
- 八幡太郎義家の家臣が片腕を切り落とされ、この地の小川で洗った
- この地に流れていた烏川と利根川の氾濫によって、何回も土地が洗われた



栄一の生家「中ノ家」（渋沢史料館所蔵）

これらが有力な説と言われている。

「新編武蔵風土記稿」によれば、天正年間（1573～92年）に開かれ、当初は5軒のみであったが、江戸時代の後期には50軒ほどに達していた。渋沢家は血洗島村の成立期からあって、栄一が生まれた頃は十数軒あった。それぞれを「東ノ家」「西ノ家」「中ノ家」「前ノ家」「新屋敷」などと呼んでいた。ちなみに栄一の家は、「中ノ家」であった。

実は栄一の家は一群の渋沢家の宗家であったが、栄一の祖父の頃は、零落して田畑一町歩前後、小地主に過ぎなかった。領主は安部摂津守、2万石余りの小大名で、実際には岡部落の陣屋によって統治をしていた。

### 水田が少なかった血洗島

血洗島村の江戸時代の産業と言え、当然のことながら農業となる。北方の利根川が昔から頻繁に氾濫して、河道の変遷が激しかったと言われている。しかしながら土地は肥え、経営規模は小さい農家が多かったものの、比較的安定していた。飢饉の被害も少なく、圧政もなく、平穏に暮らしていた。

土地は稲作には向いていないため水田は少なく、畑作、藍玉、養蚕という副業が盛んに行われていた。それに加え、詳細は後述するが水上・陸上の交通の便にも恵まれたこともあり、地域経済は豊かであったことも容易に推察ができる。

### 「中ノ家」家運再興、父 市郎右衛門

当時、「中ノ家」には女子2人だけで、跡取りの男子がなく、家運は風前の灯状態であった。そこへ救世主とばかりに来たのが、「東ノ家」の当主二代目渋沢宗助の三男元助であった。家運再興のため「中ノ家」に養子に迎えられたのである。この

## EIICHI WHO ?

### ■ 渋沢栄一についてよく知らない人のために

彼を紹介する時によく使われる言葉が、“近代日本経済の父”、“日本資本主義の父”である。

江戸時代末期に現在の埼玉県深谷市の豪農の家庭に生まれた。農民から幕臣を経て、明治新政府では大蔵省に勤める。民間に下った後、設立や経営に関わった企業がおおよそ 500 社、携わった教育・社会公共事業が同じく 600 事業。晩年には民間外交にも尽力した。

元助こそが、栄一の父、市郎右衛門である。市郎右衛門は藍玉事業で見事に成功し、「中ノ家」を短時間で再興させた。栄一が生まれる頃には、村の中で、「東ノ家」に次ぐ、2番目の資産家と評されるほどになった。

ある資料によれば、17世紀半ばに所有していた土地八反二畝一八歩（約 8,000㎡）村内 30 戸で 21 番目だったものが、栄一が生まれた頃には一町九反五畝一八歩（約 20,000㎡）東ノ家に次ぐ二番目の土地持ちになっていたとされている。

#### 恵まれていた血洗島村の立地条件

血洗島村は、水上交通と陸上交通の要衝に近かったという恵まれた立地条件にあったことが、後の日本近代経済の父、渋沢栄一を生んだ理由の一つと言っても良いだろう。

水上交通では、血洗島村のすぐ近くの中瀬村に利根川の中瀬河岸があった。詳細は 12 頁からの 3 にゆずるが、中瀬河岸は乗客の乗り継ぎ場として、また当時は、中瀬河岸の上流と下流では積み荷の制限があったため物資の積み替えの場、そして関所としての機能もあり、非常に繁栄していた。中瀬河岸の在籍船数は、江戸時代を通じて、常に 100 隻前後あったと言われている。中瀬河岸とその周辺は大いに栄えた。当然、人が往来し（志士達との交流）、江戸の流行や新しい情報、商品などは、容易に近隣の血洗島村まで入ってきたことは推察できる。船を使えば水戸に近く、水戸学（尾

高惇忠が学び、若き日の渋沢栄一にも多大な影響を与えた）が流入するのも容易であった。

昭和から平成初期の頃、中瀬地区において旧家の取り壊しや、宅地造成工事中に、地中から小判が壺に入って発見されたという事例が新聞紙面を賑わしたということを記憶している。中瀬河岸の繁栄を物語るエピソードと言えよう。

## 2 この父母にて、この子あり

### 父：抜群だった事業経営の才覚

栄一は、父：市郎右衛門、母：えいの三男坊として生まれた。夫婦は子供を 8 人もうけたが、栄一の 5 つ年上の姉なかと 12 歳年下の妹ていだけが残り、みな早世したので、結果として長男として育てられた。

市郎右衛門は、「中ノ家」に婿養子として入る際に、「家の全権を委ねて貰いたい」という条件を付けていた。市郎右衛門は、傾きかけた家業を建て直すため、実家から資金を融通してもらって、他人の手に渡った田畑を買い戻していった。なかでも藍玉の事業については、経営の才覚を表わして近隣に名が広まるほど精通していった。品質の良い藍玉を作り、多額の利益を上げて、畑も 7 反以上も増加し、藍玉販売業も盛大で、なんと村の中で 2 番目の財産家になった。さらに荒物業や質屋業、金貸し業をやっていた。栄一も 15～16 歳くらいから、家業を手伝い始めて、彼の働きも大きく寄与していた。

### 父：方正厳直な人となり

市郎右衛門の実家も農家であったが、市郎右衛門は最初は武家になって身を立てようとした人





だった。武芸を学び、神道無念流の剣法に練達していた。学問も修得しており、また文学の趣味も持っていた人であった。しかしながら、婿養子になってからは、武士への志はすっぱりと捨てて、家業に専念したそうである。いつも生活ぶりは儉約質素にして、家業にひたすら励むというしっかり者だった。

藍玉事業で村内でも有数の資産家になってからは、名主見習いに抜擢され、領主の安部摂津守から苗字帯刀を許されるまでになった。栄一から見ても「非凡な才能ある人間」だったそうだ。農家でありながら、武士気質の人で、栄一には慈父であり厳父であったと振り返っている。

さて、父の性格と評判はというと、これがまた「素晴らしい」の一言につきるようだ。

日常生活から方正厳直で、些細なことでも四角四面にすべてに対して対応する性格であった。勤勉で働くことには貪欲だったが、物欲は殆どないし、物惜しみをしない性格で、自分が正しいと信じることに對しては、身代がどうなっても構わないという気概の持ち主であったとされている。

他人に対しても厳しい人であったが、反面で人情味に富んでいた。小言をいいながらも、よく他人の面倒を見る人だった。

栄一ら子供の教育にも熱心で、一般に百姓や町人には学問は必要ないという常識がまかり通った時代において、栄一に対して、幼い頃から三字経の素読を教えた。

市郎右衛門は相当学問があり、時代の流れにも敏感で自分なりの見識を持っていた人だった。普段から特に読書をする人ではなかったが、四書五経くらいなら十分読めて、趣味として詩を作ったり、俳諧をたしなむ等の風流な面も持ち合わせている。芸事も秀で、義太夫をうなり、村芝居では女形の声色も務めていた。

### 父：栄一の進路への葛藤

父、市郎右衛門を敬愛し、信賴し、その教えを守り、父の期待に応えようと成長した栄一。また息子、栄一に出来る限りの愛情を注ぎ、学問の機会を与え、家業についても一人前になるように積極的に教えていった父、市郎右衛門。素晴らしい親子（父と子）関係であったが、唯一お互いが相容れなかったのが、生き方であった。

父の教え、「己（農民）の分を守れ」を栄一は受け入れることはできなかった。一度は農民を捨て、武士になりたいと思っていた父、入り婿になった時点で、その思いはきっぱりと捨て、農民として家業で大成功を収めた。世の中の大変革期においても、農民は自らの分を守るべきだと説く。息子は農民を捨て、故郷を捨てて武士となって、志士となって、倒幕の道に進みたいと譲らない。そして息子は己の分を捨て、自ら考える武士への道走り出していく。

おそらく父は胸中に、自らの若き日を想いを思い出していたであろう。まさに父は自分が諦めた道を、「息子が代わって進んでいってくれる」と嬉しく思いつつ、家族のため、家業の為に思い留まるよう説得するのだが……。息子、栄一は自らの道を進むことを決断し、父はそれを許すしか道はなかった。

### 母：慈悲深い、えい

母、えいは、家付きの娘であったが、偉ぶらないで慈愛に富んだ人だった。えいについて自らのことには全く欲がなく、施与が唯一の楽しみであるとか、情が深く、窮乏している人を見ると涙がとまらなくなり、号泣してしまう、とまで描いている資料もある。

## NATIVE FUKAYA



昨年、渋沢栄一翁の一万  
円札の肖像そして大河ドラマ  
主人公決定という知らせは本市  
に元気や笑顔をもたらしました。

深谷市長  
小島 進氏

これまで、地道に様々な顕彰に取り組んできた  
市民の皆さんの活動が実を結びました。

今年は栄一翁がアンドロイドで甦り、渋沢栄  
一記念館で皆さんにご覧いただけます。さらに、  
この好機を生かし、新型コロナウイルス禍によ  
る制約もありますが、ドラマ放送に合わせた  
様々な事業を展開してまいります。

また、7月末にはレングを使い深谷らしさを  
演出した、市役所新庁舎がオープン、住民サー  
ビスの向上、利用しやすい庁舎を目指します。  
ぜひ、深谷市にお越しいただき、栄一翁の精神  
に触れ、多くの皆様に地域の魅力を感じてい  
ただければ幸いです。

栄一は「陰になり日向になり、よく子供たちの面  
倒を見てくれる人だった。夫が厳格な人だったから、  
苦労はあったとは思いますが、今になって、自分が幼い  
ころに世話をしてくれた母のことを思うと涙がこぼ  
れてくる。」とまで母、えいを褒めている。

### 母：ハンセン病患者との交流

母親の人となりを語る上で、必ず出て来るのが、  
ハンセン病患者との交流のエピソードである。

人が困っていると見てられない性分だったえい  
は、隣にいたハンセン病患者と親しくしていた。  
当時（江戸時代末期）は治療法もない不治の病で、  
“強い伝染力”があるとか、“遺伝病”であるとか  
言われて世間から忌み嫌われた。当然に患者は生  
活が困難になり、家を追われたり、極貧の生活を  
強いられることが多かった時代である。

栄一が「ハンセン病は伝染する」と言っても、「そ  
んなことはない。お医者さんがうつらないと言っ  
た」といって親切に世話をした。村八分同然になっ  
ていた患者の女性を自宅で入浴させたり、共同浴  
場で一緒に入浴した。えいは陰口にも全く気にし

なかった。

栄一は、母の思い出として、「母は大変慈悲深い  
人でした。特に私を大変愛してくれました。寒い  
時には、遊びに出た私を探して、嫌がる私に羽織  
を着せてくれるような人でした。」と語っている。  
「ちょっと情が深すぎる人、慈悲善行に富んだ人  
でした。」とも語っている。

栄一は、生涯で「500の企業経営と600の社会  
事業に関与した」と言われているが、高齢になる  
につれて企業経営からは引退しつつも、決して社  
会事業からは引退しなかった。このことは、幼少  
期の母の背中から学んでいたことが一つの重要な  
要素となって取り組んでいたと思えてならない。

## 3 渋沢栄一を生んだ中瀬河岸と中山道深谷宿

さて冒頭の血洗島村紹介の箇所でも触れたが、  
日本の近代経済の父である栄一が過ごした地域、  
血洗島村の周辺地域（現在の深谷市）が、当時、  
経済、産業の発展や文化や情報の流入、人の交流  
といったところで恵まれた立地条件であったこと  
は触れた。だが、既刊の栄一についての書籍等  
でも、中瀬村の中瀬河岸について触れているもの  
は、そう多くない。そこで特に血洗島村に近  
かった中瀬河岸にスポットライトを当てて考  
察したい。

中瀬河岸は利根川の渡船場として、6～7世紀  
頃から上野国（現群馬県）方面へ渡る交通路  
として利用されていたとされる。その後、家康  
が天正年間から寛永時代にかけて江戸城修理  
をした際に、大きな石材は伊豆や相模から、土  
圧や水圧を防ぐために石垣の裏側に積まれた  
栗石を、中瀬付近のものを使った。慶長12  
(1607)年、江戸城修理の際に中瀬河岸から  
栗石を輸送したという記録が残っている。



現在の埼玉県本庄市から熊谷市にわたる地域の栗石とは、浅間・白根山系の火山石で、品質も高く、何より加工し易いとされた。その栗石を輸送するために中瀬河岸が出来、その後年貢米輸送、各種商品の河岸場と発展していった。

また中瀬河岸は、中山道深谷宿から分岐する脇往還北越街道と結ばれ、それに渡船を利用すると、上州を経て、越後へ通じる交通の要衝でもあった。「深谷市史」では中瀬河岸の通常の河岸にはない3つの特徴を紹介している。

#### 物資の積み換え所（重量制限）

下流で千俵、中瀬で五百俵、倉賀野で三百俵が標準で、すべての物資の重量制限が行われた。上州、信州、越後の諸大名は年貢米の回送ルートの拠点を上州倉賀野に置いた。倉賀野を利用した大名は

50 藩を超え、商人が動かした米は 10 万俵といわれている。倉賀野まで馬の背で運搬された米俵は、ここで大型船に積み替えられて利根川を利用して江戸に向かった。

また深谷宿や中山道の宿場や秩父方面からも荷物が集まってきたと言われている。主な出荷品は、廻米、藍や木炭で、入荷品は塩、醤油や肥料用のイワシ等であった。当時の烏川は水量が豊富であり、荷船の運航ができた。また江戸から購入された生活物資や生産資材の輸送は利根川の舟運を利用しておこなわれ、中瀬河岸がそれらの物資の積み込みや荷揚げでにぎわった。中瀬河岸は高瀬舟が 18 隻、二百石船 12 隻、百石船 6 隻など合計で 101 隻があり、百石船以上が多いのが特長で江戸への船客輸送で明治末まで続いた。

18 世紀後半の利根川沿岸村概要図



### 乗客の乗り継ぎとしての河岸場、 流と川幅から 上下流の接点

もう一つ、中瀬河岸の発展を決定させたのが、中瀬河岸が利根川の水流と川幅から上流と下流の接点であったという地理的な条件であった。

上流から小舟で来た船客は中瀬河岸で大きな船に乗り換える決まりがあり、陸路で中瀬まで来る旅人もいた。倉賀野（現群馬県）から江戸まで直接行くことは許されず、乗り換える時には手形提示が求められた。また、対岸の上州（群馬県）への渡船場としても重要な拠点でもあった。

### 地場産業、藍栽培も支えた中瀬河岸

これだけの機能があれば、当然人が集まる。人が集まれば金が動く。金が動けば商売が始まる。といったことである。

中瀬河岸には、問屋、旅籠、茶屋、質屋などが並び、船が着くと酒の魚などを仕込んだ「煮売船」、風呂を積んだ「湯船」などが寄ってきたと言われている。宿屋（15軒）、飲み屋、風呂屋、船大工、医者や馬を世話する業などが自然と集積していった。

先述の尾高惇忠も中瀬河岸を利用して水戸藩士らと交流を重ね、水戸学を学んでいったものと考えられる。

また藍の肥料購入や藍玉の商品作物の扱いで、中瀬河岸を利用することが極めて有利だった。藍栽培は、人糞の他、干鰯肥料などが必要だったが、血洗島村は利根川水運を通じて九十九里から容易に入手できる地理的環境にあったと言われている。栄一の実家の事業を支えた藍玉製造・販売も、中瀬河岸がなければ、あのように成功しなかったかも知れない。

余談だが、栄一が後に攘夷挙兵のため高崎城乗っ

取りを惇忠らと計画した際に、江戸で調達した武器を、利根川を利用して中瀬河岸まで運んできている。

### 中山道最多の旅籠数の深谷宿

次に中山道の深谷宿である。江戸から9宿目、約20里の同宿は、1日半もあれば江戸に行くことができた。深谷宿は天保年間には、中山道69宿で最大の旅籠の数を誇るほど賑わっていた。栄一も13~14歳の時に初めて父と一緒に深谷宿から江戸に行った。その後も度々、深谷宿から江戸を訪れている。

血洗島村は江戸に通じる二大幹線を通じて、新しい情報、文化や物が流入しやすかった。それらに直接、間接であれ栄一は大いに触発されていったことは、後の行動を見ても明らかである。

利根川の水運と中山道の陸運に隣接した地域が栄一の知識、人脈や経済感覚を磨いていった。

歴史に“タラレバ”は禁物とは言われるが、“渋沢栄一”がもし血洗島村以外の場所に生まれ育った時に、今、我々が知る渋沢栄一が生まれていたか、甚だ疑問であると言えよう。

両親の人格しかり、尾高惇忠（栄一の従兄弟次号で紹介する）の教育しかり、家業の藍玉しかり、そして中瀬河岸と深谷宿の立地しかり、全てが揃ってこそその渋沢栄一と言えよう。

その意味もあって、本稿では一般に販売されている他の渋沢栄一関連の書籍等と違い、彼の血洗島村でのエピソードを4割くらいとすることとした。本誌が8/9月の合併号となるため、次回10月号においては、栄一の人生の師尾高惇忠や渋沢家を支えた藍玉についても紹介していきたいと考えている。



■ 渋沢栄一翁 略年譜

	年	月	摘要
生誕から大蔵省辞職まで	1840年	天保11 2月	13日、武蔵国榛沢郡血洗島村（現埼玉県深谷市血洗島）に生まれる
	1845年	弘化2 -	父市右衛門より読書を受ける
	1847年	弘化4 -	従兄弟尾高惇忠の塾に通い始める
	1851年	嘉永4 -	剣法、神道無念流を学び始める
	1853年	嘉永6 3月	父に連れられて初めて江戸見物をする
	1854年	嘉永7 -	叔父渋沢保右衛門に連れられ江戸へ商況視察に行く
	1855年	安政2 -	父の命に従い、家業（農業及び商業）に従事する
	1856年	安政3 -	父の代理として御用金の件で岡部の陣屋に出頭
	"	" -	父に代わって信州、上州と秩父の年4回の取引先への巡回を担当する（この年より4～5年間）
	1858年	安政5 12月	尾高惇忠の妹、千代と結婚する
	1861年	文久元 春	江戸に出て海保塾にて学ぶ傍ら、千葉道場にて北辰一刀流を学ぶ
	1862年	文久2 -	家業に従事しながらも、天下国家の時事を論じる
	1863年	文久3 春	江戸に出て再び海保塾、千葉道場で学びながら江戸と血洗島村を往復する
	"	" 8月	高崎城乗っ取り、横浜異人館焼討ちを計画
	"	" 11月	計画を中止し、渋沢喜作と共に京都へ行く
	1864年	元治元 2月	一橋家に出仕する
	1866年	慶應2 8月	勘定組頭として一橋家の財政改革に辣腕を振るう
	"	" "	幕臣となり陸軍奉行支配調役（京都屯所勤務）
	"	" 11月	徳川昭武に随行しパリ万博幕府使節、フランス留学を命じられる（1868年12月帰国）塾居中の慶喜と静岡市で面談する
	1868年	明治2 1月	静岡藩勘定頭支配同組頭、商法会所頭取となる（妻子を静岡に招き、数年ぶりに一家団欒する）
	"	" 11月	民部省租税正に任ぜられる、同改正掛長になる
	1870年	明治3 閏10月	富岡製糸場事務主任になる
	1871年	明治4 8月	大蔵省大丞になる
"	" 11月	父、市郎右衛門死す（享年63歳）	
1872年	明治5 2月	大蔵省少輔事務取扱となる	
1873年	明治6 5月	井上馨と共に大蔵省を退官する	
1873年	明治6 6月	第一国立銀行総監役になる	
1875年	明治8 8月	第一国立銀行頭取になる	
"	" 9月	商法講習所創立（現在の一橋大学）	
1878年	明治11 6月	東京証券取引所 開業	
"	" 8月	三菱商会岩崎弥太郎と面談（隅田川船中大論争）	
"	" "	東京商法会議所会頭に選出される	
"	" 12月	東京海上保険会社開業許可	
1879年	明治12 8月	東京府養育院院長に任命される	
1881年	明治14 11月	日本鉄道株式会社設立認可される	
1882年	明治15 7月	ちよ夫人死去（翌年、伊藤兼子と再婚）	
1887年	明治20 10月	日本煉瓦製造株式会社（深谷市）創立、社長となる	
1891年	明治24 5月	家法を制定し、家訓三則を作る	
1892年	明治25 11月	暴漢に襲われる（暗殺未遂事件）	
1896年	明治29 9月	国立第一銀行が第一銀行へ、引き続き頭取となる	
1900年	明治33 5月	男爵を授けられる	
1901年	明治34 5月	井上馨より組閣に際して「大蔵大臣」就任を依頼されるが、固辞する。このため井上馨は組閣断念	
1907年	明治40 2月	帝国ホテル創立（發起人総代）、初代社長となる	
1915年	大正4 10月	パナマ運河開通博覧会のため渡米	
1916年	大正5 7月	喜寿を機に実業界を引退する。「論語と算盤」を刊行する	
"	" 10月	理化学研究所創立委員長となる	
1920年	大正9 9月	子爵を授けられる	
1926年	大正15 -	ノーベル平和賞候補となる	
1927年	昭和2 -	前年に引き続き、ノーベル平和賞候補となる	
"	" 2月	日本国際児童親善会創立・会長となる。日米親善人形歓迎会主催	
1931年	昭和6 11月	11日午前1時50分、永眠する（正二位に叙せられる）	

（渋沢史料館のデータベースをもとに、当研究所作成）